

愛知淑徳短大 神谷い代子

○土田 正子

1. 荘重で優婉な美しさを持つ能は、最も卓越した日本の芸能である。能の成り立ちは舞と音楽（謡・囃子）であるが、その登場人物を具体的に表現するのは、面と装束である。特に、硬地の装束がかたちづくる独特の姿、動きにつれて、一層きびしくもまた華麗さを出す装束は、舞台芸術としての演出効果の上からも重要な役割を果たしているのであるが、その上に、舞台上のうつりや、役柄の表現、又は、その曲の内容に即した色、文様、季節感などの心配りが大切な一つの要素でもあると考える。そこで、私たちは一般意匠や染織技術の進歩、西陣織の発展にも大きな力を持ったといわれるこの装束の色、文様について、考察したいと考えたのである。

2. そこで、私たちは、著書、文献、写真図版、実物を参考資料として、能の構成、曲目の類別、能装束の分類、染織、色、文様について、一般的な考察と続いて、徳川美術館襲蔵の能装束の考察、さらに、名古屋城内における演能状況を記録によって考察した。

3. 徳川美術館の能装束の分類については、上着類は唐織が最も多く、狩衣がこれにつぐ。色は赤、黄赤、黄、青、紫系が多くみられた。文様では、翁の狩衣のキマリ文様、蜀江錦が見受けられ、その他、一例として、袷狩衣9点の文様は独特の豪華なもので、曲目の内容と文様の調和によって、一層の効果をおよぼすものと観察された。